



特集「桜」

- : 小原の四季桜
- : 桜と虫
- : 平戸橋さくらまつり
- : 連載 矢作川のいきもの11
- : 今月の一枚

小原の四季桜

牛田 朝見

小原の四季桜は、文化・文政年間、小原北町の藤本玄碩（ひん せき）という漢方医が名古屋方面から譲りうけた苗を植えたのが最初で、これが親木となり広まったと言われています。この親木は明治34年に福原小学校が建設される時、学校のシンボルにしたいからと懇願されたため、藤本家の前山から運動場に移植されました。親木の桜は樹齢、花のすばらしさに加えて樹形が見事だったために、地区中の評判となり、地区住民に愛されていました。ところが、昭和9年当地を襲った室戸台風により倒れ、枯死してしまいました。しかし、その子桜から分かれた孫桜が現在小原の四季桜の中心になっています。

明治39年日露戦争の犠牲者の忠魂碑を建立するにあたり、所望され分植された四季桜が前洞町にあり、この樹齢100年を超える名木は愛知県の天然記念物に指定され、現在も素晴らしい花を咲かせます。

昭和53年、郷土の自然をみんなの財産として自らの手で守り育て「美しい魅力ある地域」づくりを心がけ、また豊かな環境づくりを進めるため、地区民に親しまれる木、花、鳥を制定することになりました。そして地区民から募集した結果、木として四季桜、花はささゆり、鳥はうぐいすと定められました。これを地区の象徴として、地区民が常に自然を愛し、物を大切にす美しい心、思いやり、親切な心などを培い、自分の心をみがきたいと願ってきました。

この頃、四季桜の繁殖は大変むずかしく、株分けで増やす方法しか知られていなかったため、地区でもむずかしか植えられていませんでした。そこで、尾張の園芸家に依頼して、接木等により増やしてもらい、市民広場へ植栽しました。広場は、25年経過した現在では小原地区の四季桜まつりイベント会場の原点となっています。その後、行政、森林組合の連携による研究の結果、挿し木により数多く生産する方法が確立され、各家庭に配布され、公共施設や

民間の山林へも植栽され、現在もその繁殖に力が注がれています。そして、小原一円に6,200本の四季桜をかぞえるに至りました。

四季桜は、春は3月下旬より4月中旬に開花し、秋は10月下旬より12月中旬頃の長きにわたり2度可憐な花を咲かせます。親はマメザクラ×エドヒガンで、その種間雑種と考えられています。一重5弁の平開形、白または淡紅色の小さな花を数多く付けます。全国に秋から冬咲きの桜を保護している所は20数ヶ所ありますが、その中で、四季桜と呼び、保護している所は数ヶ所しかありません。その他は冬桜、十月桜、寒桜、不断桜、子福桜と呼ばれていますが、たいていはこの種です。

四季桜は、花の大小、花弁の形、雄ずいの数、果実の形、味、染色体数、成葉の形、葉の毛の多少、萼筒（がくとう）の形、樹形等に特徴があり、二季咲きの全国でも数少ない非常に珍しい桜です。年2度可憐に咲き誇る花は多くの人々の心を癒してくれます。それが四季桜なのです。

(うしだ あさみ、 小原村観光協会 事務局長)



▲小原を彩る四季桜

日本人は桜が好きである。「花」といえばそのまま桜の花を指すことも少なくない。桜が日本人に異常ともいえるほど珍重されはじめたのは平安中期からのことらしい。「万葉集」で最も多く詠まれている花は萩や梅で、桜はその1/3ほどにすぎないが、「古今集」になるとそれが逆転して桜が断然優位に立つのだそうである。その後、中世から近世へと桜熱は上昇の一途をたどり、江戸後期に至って隆盛をきわめた。以来日本人は貴賤の別なく、春ともなれば「花」を思って気もそぞろになるのである。

ところで、日本人の桜の鑑賞のしかたはちょっと変わっている。それは「花見」という形をとり、咲き揃った桜の下で酒宴と歌舞をくりひろげるのである。外国にはこのように特定の植物（花）を愛でながら大勢で飲会を楽しむ習俗はどこにもなく、「花見」はわが国固有の珍しい文化であるという（『花見と桜』 白幡洋三郎 2000 PHP新書）。この文化は現代も健在で、オフィスの催す花見のために若い社員がはやくから「場所とり」に派遣されるなどという涙ぐましくもほほえましい図も見られるが（筆者の属する会社でもやったことがある）、これなどは、なるほど外国人にはまず理解されまい。

さて、話は一転するが、桜はヒトだけでなく、いろいろな昆虫たちにも愛好されている。俗に「桜には毛虫がつきやすい」とされるが、事実、葉桜の頃になると種々の蛾の幼虫が樹上に現れる。なかには恐ろしい大群をつくったり、枝から糸でぶら下がってくるやつもいて虫ぎらいの人をふるえ上がらせる。しかし、ほんとうに桜に毛虫は多いのだろうか。

『蛾類生態便覧』（宮田彬 1983 昭和堂印刷）から、ある植物を寄主とする蛾の種数を拾い出して見ると次のようになる。

植物につく蛾類の種数

植物	蛾の種数
クヌギ(ブナ科)	158
コナラ(ブナ科)	147
リンゴ(バラ科)	111
クリ(ブナ科)	82
ソメイヨシノ(バラ科)	78
オニグルミ(クルミ科)	48
ウメ(バラ科)	46
ケヤキ(ニレ科)	40
:	:
カラマツ(マツ科)	21
イネ(イネ科)	16
アカマツ(マツ科)	13
スギ(ヒノキ科)	12
ヒノキ(ヒノキ科)	8

(宮田 1983 より)



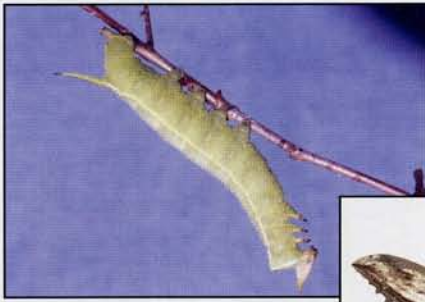
▲ウスバツバメガ

これによると、クヌギ（158種）やコナラ（147種）が抜群であるが桜の代表ソメイヨシノには78種の蛾がつき、堂々ベスト5に入っている。ソメイヨシノは栽培品種であるが、よく調べればヤマザクラなどの野生種にも同じくらいの蛾がつくだろう。同じバラ科のリンゴやウメも上位にあることからして、どうやらブナ科とバラ科の植物は蛾類にとりわけ好まれているらしい。これに対して単子葉植物ではイネが1位であるがわずかに16種、裸子植物ではカラマツが21種とやや多いが、マツやスギは12、3種で、いずれもあまり「虫が好かない」といえる。一方、蝶類は、種類が少ないせいもあって、桜を含むバラ科植物を食べるのはエゾシロチョウ、リンゴシジミ、カラスシジミ、メスアカミドリシジミの4種ぐらいである。このうち狭義のサクラ類に限ってつくのはメスアカミドリシジミだけであろう。しかし、^{りんし}鱗翅目として見ると「桜に毛虫」の俗説は真実であった。ただ、幸いなことに花の咲く頃にはまだ毛虫はいないか成長していないので花見の宴にはさし障りはない。もし桜が1月遅れて葉の伸びる頃に咲くとしたら、毛虫のせいで、あのユニークな桜文化は発達しなかったかもしれない。

蝶や蛾だけではない。桜にはいろいろのアリマキやハムシがついていたり、オトシブミがせっせと葉を巻いていたりする。幹や枝に食い入る甲虫類も多く、あの美しいヤマトタマムシも桜の枯木からよく出る。京都の東山の麓では老木のあるところに、キマダラルリツバメという珍しい蝶が発生する。これは桜をたべるのではないが、その幹に巣食っているアリに蝶の幼虫が養われているのである。

こうして見ると、桜は桜自身とその愛好家たちには迷惑かもしれないが、昆虫にとっては実に重要な資源となっているのである。

余談であるが、桜の代表のようにいわれるソメイ



▲オオシモフリスズメ>>p.04

ヨシノは、実は江戸後期に野生種の交配によって作り出された品種という。枝がかくれるほど群がり咲くその花はなるほど絢爛豪華で街中の公園や堤にはよく似合う。しかし山奥の林道やダム湖畔などにまで、やたらに植えるのはいかがなものか。全国どこでも同じ風景では面白くない。特に場所が合わないのか、天狗巢病にやられて無残な姿をさらしているなどは興ざめである。同じサクラでも、こういう所にはヤマザクラなど地域に合った「天然もの」を植えた方が、景観の上でも虫や鳥を呼ぶ上でもよいのではないだろうか。

(ながい まさみ、 環境科学株式会社)

平戸橋さくらまつり

矢頭 俊和

豊田市民芸館は、猿投山を仰ぐ矢作川のほとり、自然環境豊かな平戸橋公園の一角にあります。

昔から平戸橋より上流約2キロメートルの周辺一体は勘八峡といわれ、溪谷を矢作川の急流が流れ、その自然美は、大正10年頃に愛知県新十名所に入選し、広く世間に知られていました。この頃鵜飼も行われ、3～4年間は鵜飼船が上下していました。しかしその後、発電所が建設され越戸ダムが昭和4年に完成すると、三水湖と呼ぶ人口湖が造成され、ボート乗り場もでき勘八峡の姿も大きく変わりました。昔から船着場のあった平戸橋付近は、訪れる人々のいこいの場となり、ダムの水は枝下用水に流され、その堤の桜、淡水魚の養殖場、前田公園、桜台遊園地等、水と溪谷をもつ観光地として、また、桜の名所として多くの観光客が訪れました。

昭和22年には、地元の本多静雄氏らの有志によりヤハギ川観光協会が設立され、平戸橋・勘八峡桜祭りとして多彩な行事が催されました。「勘八音頭」も募集発表され、平戸橋・勘八峡は日本テネシーと命名されました。その後桜祭りは衰退しましたが、昭和31年ごろから、本多静雄氏が自宅で猿投古窯出土品・古瀬戸の焼き物を陳列し、「陶器の鑑賞と桜見の会」を開催するようになりました。全国から多くの方々が本多邸を訪れ平戸橋の桜を楽しまれました。この催しは本多氏が亡くなる平成11年まで続けられました。

また、平戸橋公園一帯の桜は古木になりましたが、地元の皆様の努力により桜の植樹が続けられ、桜の名所が復活してきました。

地元でも平戸橋公園一帯で、平戸橋いこいの広場

・猿投台交流館・地区コミュニティー会議主催の平戸橋桜まつりを開催し、また、民芸館でも友の会主催による桜まつりを平成10年より開催してまいりましたが、平成13年より合同で桜まつりを開催するようになり、市内外から訪れる多くの方々に楽しんでいただけるようになりました。

今年度も、4月2日(土)の午前10時～午後3時にかけて平戸橋桜まつりを開催いたします。主な内容は、食品バザー・茶席・野外演奏会・民芸館講座体験コーナー・講座作品バザーなどが人気です。参加自由ですので、多くの方々のご参加をお待ちしています。春の暖かい一日を桜の下でお過ごしください。

連絡先 豊田市民芸館

TEL/0565-45-4039

FAX/0565-46-2588

(やとう としかず、 豊田市民芸館 館長)

▼ソメイヨシノ



連載 矢作川のいきもの11
オオシモフリスズメの交尾

これは、オオシモフリスズメというスズメガ科の一種が枝にとまって交尾している決定的瞬間です。成虫は年1回早春に出現し、大きな個体では翅を広げると15cmほどにもなります。幼虫はサクラやウメなどを食することが知られており、老熟するとやはり10cmほどの大きなイモ虫になります。

現在信州伊那谷より西日本に分布が知られていますが、この豊田市周辺は全国的に最も多く見られる地域となっています。夜行性で特に夜遅くなって電灯に飛来し、

早朝水銀灯の下でうごめいている個体と同時に、鳥に食われて翅だけが散乱しているものもしばしば見られます。鳥にとっては食べ甲斐のある良い餌かもしれません。この2個体が並んで見られる幾何学模様からは、自然の造形の神秘さを感じずにはられません。この成虫は手で持つと「ギュッギュッ」という音を出します。幼虫も同様で、これは敵への威嚇かもしれません。（文章：間野 隆裕）

▶
豊田市自然観察の森にて
水野マリ子氏撮影

02 03 28



今月の一枚

ホームページリニューアルに文字通り花を添えたハルリンドウです。

ホームページからは、過去のRioを全てご覧になることができます。

Rioの最新号をお求めの際は、直接研究所にお越しいただくか、市役所南庁舎1Fまでお立ち寄り下さい。

◀ photo by Y.Yoshitsuru



ホームページのリニューアルに続き、Rioの編集にも少し工夫をと、今年度は月毎にテーマを意識しようと思っています。今月号のテーマは「桜」としました。桜を巡り、流域の人々や生き物などの話題を探し出しました。限られた誌面で「桜」について語り尽くすにはほど遠いのですが、今月のRioをきっかけに、皆さんも身近な春の花「桜」にまつわるエピソードを持ち寄り、春の宴で盛りあがってくだされば幸いです。（内田）

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19

豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860

FAX 0565-34-6028

E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

R2100
再生紙を使用しています。